**稽古と無心（続）－ケアの問題へ・ケアの問題から**

１、鈴木大拙の無心理解に依拠しつつ、「無心の知恵」という地平を設定する

・世阿弥　←　「無心の知恵」　→　対人ケア

「無心の知恵」はなぜ「対人ケア（対人関係）」に言及することが少ないのか。

・「純粋経験」－　「パフォーマンス」　－　「対人関係」

・臨床家の言葉　　　「臨床の知」　　フィールドワーカー

２、理論やテクニックが通用しなくなる時

・「最後は、無心になって患者と向き合うことができるかどうか、それが鍵になる」。

・「通用しない」ということ　　⇔　理論やテクニックですべて対応できるという思い込み

自分の枠組みでは対応できない。今までのやり方では通用しない。危機・挫折・行き詰まり。

・何かがなくなった時、初めて、内側から動き出す。

・「似せぬ」と「無心」と「通用しない」　位相の違い

　似せることができない危機、断念

３、「似する」に向かうベクトル　⇒　理論やテクニックを学ぶこと

1、順序の強調　「臨床の知」　「書物の知」　「科学の知」

2、型　　型と枠　「枠」の必要　　「やさしさ」を守るための枠

3、器　　ケアにおける「器」　　センス、柔軟性（しなやかさ）、

4、稽古開始以前の身体　　「やさしさ（やわらかさ）」

４、「似得る」の出来事　　ケアにおける「似得る」とは

・その時その場に最もふさわしく響き合う　「即興性＝創発性」を可能にする身体

・一体感とメタ認知　　「二重性」

５、「他人の役に立ちたい（相手のために）」という思い（パトス）の問題

　自然体と向上心

＊「無心になされるケア」　＊無の存在論　　＊無心の知恵は「役に立つ」か